

阿部 公彦

どんなジャンルにも「ああ、
そつだよね」「といひよひな暗黙
の了解がある。たゞえば四コマ
漫画の登場人物はなかなか年を
とりぬいとか、推理小説の犯人
は、必ず既に登場した人物
の中にあるとか、屋メロに
登場する「危険な男」は区
音の名前が多そつだとか
(カシワギ、クロサワ、キ
ジマなど...)。こつした要
素はルールとまづでは言えな
くとも、ある種の気配や匂
いを醸しだし、ジャンル特
有の世界を作る。

現代詩ですつて目ごつていく
特徴といへば行替えだ。頻
繁な改行と、その周りで生
まれる広大な余白と、い
かにも現代詩的な静寂や余
韻やムードが漂う。その微
妙な空気感をどう表現する
かに詩人も力を注ぐ。現代
詩ならではの気配とは、ま
まこつて気配や匂いが充滿する
こと自体にある。前面に出
るのは、世界を形容詞的につひ
える感受性なのだ。

しかし、ときこそんな形容詞
偏重を突き破る詩人が現れる。
今月はそんな詩人を二人とりあ
げたい。まず、現代詩文庫(思
潮社)に作品が集成された小笠

形容詞偏重を突き破る

原鳥類。「暗い人形のガラスの
棚は、のよつと数年間放置され、
コンクリートも生きた魚礁・
魚鱗、腐敗水族館・あえかなく
さつていておかしい、やわらか
くくんの緑色の寒天ゼリーみずう
み…」(「腐敗水族館」)と続
く詩行は、カクカクしたリズム
も耳に残るが、その基底に生物
を含めた物質をめぐる用語への
こだわりのがある。情緒がないの
ではない、むしろ情緒はあふれ
ている。ただ、それが徹底
して物質的名詞的に表現さ
れるのがおもつた。

一方、窪島誠一郎の『く
ちじける』(マーティアンド
クラフツ)は、言ってみれ
ば動詞的な詩集だ。スタイ
ルは寓話風の散文詩や詠
嘆、オマージュなどだが、
基底にはいつも動作や行為
がある。「これは／開かな
いポストです／手紙を入れ
ても 配達されません」
(「開かないポスト」)。

「開かないポスト」では
表題作「くちじける」では
語り手が自分の入る 箱を
見つめる。ラストが鮮烈だ。
「わたしは／おまをを／愛
しいいたすつ／しあやんで
／ものいわぬ箱を／そつと
／くちじける」骨太な情念
が、こつして「行為」に託され
る。形容詞に頼らずに感情を表
現する詩には底深い力を感じ
た。珍しい種類の興奮をおぼえ
る詩集だ。(東京大准教授)
(「詩とことば」は、次回から
3か月おきの掲載となります)